

話は、2日前に遡る。

その夜。

「世界の都」のまさに中心、エンドール城内にいた人は全て、その叫び声に仰天した！

「な、何ですってえーっ!!?」

*

この物語は、後に「不屈の王女殿下（ハイネス）」と呼ばれる、サントハイム聖王国第一王女、アリーナ・フォン・サントハイム殿下の、熱く激しい闘いの記録である！

熱血格闘系・ドラクエ4二次創作小説

「不屈の王女殿下（ハイネス）」

～エニックス「ドラゴンクエスト4・導かれし者たち」第2章より～

第1話 「発端」

あさづけ兄貴

そう叫ぶと、アリーナは、今にもつかみ掛かりそうな勢いで、エンドール王に詰め寄った。

「優勝者への報酬が、モニカ姫との結婚ですってっ!？」

「い、いや、あの、その」

しどろもどろになりつつ、エンドール王は、その丸顔に浮かぶ汗を、しきりにハンカチでぬぐった。

「姫様っ！」

「これ！ お控えなさいませ！」

驚いたクリフトとブライの制止も聞かず、アリーナは一気にまくし立てる。

「どうして、そんなお触れを出したんですかっ！ モニカ姫本人にちゃんと断ったんですかっ!？」

そのモニカ姫本人も、ハラハラ顔で横で見ているのだが、アリーナには、そんなことを気にかける様子は微塵も見えない。

「こ、これっ、姫様！ お控えなされと」

さすがに、後方に控えた姿勢のまま、ブライが語気を荒らげる。

しかし、エンドール王は、汗を拭き拭きではあったが、詰め寄られている状況に似合わない穏やかな目をして、静かに、言った。

「良い。ブライ殿」

「しかし」

言いかけたブライを制するように、またもエンドール王は言った。

「良いのだ」

そして、今度は改めてアリーナの方に向き直り、続けた。

「アリーナ姫、恐らくはそなたの思っておる通り これは、余が一人で決めたこと。モニカには相談しておらぬ」

「まったくもう」

アリーナは、まるで自分の事のように、両手を腰に当て、ふくれっ面で言った。

「どうして、そんな事を？」

「余は今回、第34回大会から数えて25年振りに、武術大会を復活させた それはお分かりであろうな」

「ええ」

「その久しぶりの大会に、ろくな格闘家が出ない、というのでは寂しいのでな 彼らにとっての目玉として」

と、エンドール王が言いかけたところで、アリーナが不機嫌そうな口調で、口を挟む。

「んで、一人娘をプレゼント、なんて言っちゃったわけなんですね？ 本人に相談もなく」

「プレゼントなんて、余は一言も言っておらんがのう」

「同じことですっ！」

またも怒るアリーナ。

「どっちにしろ、勝手にモニカ姫を優勝商品にしちゃう事には変わらないじゃないです

「あっ！」

腰に左手を当て、立てた右手の人差し指を動かしながら、アリーナが言う。

「うむ　まあ、それは　」

たじたじとなるエンドール王。

傍から見ると、まるで、アリーナがエンドール王を説教しているように見えた。

*

ブライは、内心、ひどく焦っていた。

なぜならば、彼の眼前で、大きな外交問題が巻き起こっているからであった。

一国の王女が、他国の王をやり込めている、この場面。

幸運な事に、エンドール王が事前に入払いをしたおかげで、現在この王室にいるのは、エンドール王の親子とアリーナたち3人、合計5人だけである。

だが、もしこれを、偶然、衛兵が覗き見してしまったりしたら、彼は何と思うだろうか。

自らの主君が、年端も行かぬ他国の王女にひどい侮辱を受けている

そのように、彼の目には、この光景は映らないだろうか？

もし、そのような噂が広まれば、それが元で、エンドール王家とサントハイム王家、両家の、そして両国の間に、決して埋まらぬ溝が出来てしまうことになりかねない。

それだけは、避けねばならないのである。

(何とかして、姫様を止めねばならぬが　)

ブライは、そう思っていた。

アリーナを止められるのは、彼しかいなかったのである。

アリーナとエンドール王の様子は、変わることがない。

モニカ姫は、王の隣で、ただおろおろして成り行きを見つめるばかり。

クリフトに至っては、ブライの隣で、凝固したまま、冷や汗を流していた。

ブライは、クリフトの方を、ちらっ、と見やる。

(詮ない事が　初めての「外交」が、この修羅場ではのう　)

神官学校を、その年の首席　誰よりも優秀な成績で卒業したクリフト。

頼りになる神官ではあったが、こうした「政治」がらみの、しかも突発的な　それも、

教会の勢力の強いセントハイムの中ならばとにかく、いきなりの他国でのアクシデントに対応できるだけの「経験」を積むには、いかんせんまだ若過ぎたのである。

(若さゆえ、何か突拍子もない解決法でも思いつくやも知れぬと思ったが
それを期待するのは、さすがに酷というものか)

クリフトが知ったら怒りそうな、そんな事を、ブライは考えていた。

しかし

(それにしても 妙じゃ)

同時に彼は、この場のやりとりに、妙な「違和感」のようなものを感じていた。

(なぜ、姫様は、あそこまで怒りをあらわにしなさる？ それに なぜ、エンドール
王は、あそこまで言われても怒り出さぬ？)

自問自答する。

だが、答えは 出ない。

(解せぬ)

*

「それで、だ。 実は、アリーナ姫、そなたに頼みがある」

ふと、ブライが顔を上げると、アリーナに、エンドール王が、そんなことを言っていた。
先ほどと同じ、穏やかな目だった。

「お父様 」

初めて、モニカが口を開いた。

「^{わたくし}私 は やはり、私のためにアリーナ姫様に迷惑をお掛けすることは 」

「いや、モニカ。言わせておくれ」

エンドール王は、言葉を続けた。

「アリーナ姫、そなたの言う通りだ。余は、自分の娘を『賞品』としか考えて
いなかったのかも知れぬ」

「 」

「しかし、この布告につられて、武術大会に参加する者が増えた事もまた事実。
今さら、布告を取り下げることとはできぬ」

「じゃあ、結局、何も変わらないじゃないですか」

アリーナの鋭い指摘が飛ぶ。

「そう。だからこそ、そなたに頼みたいのだ。アリーナ姫」

王は、真っ直ぐアリーナの目を見た。

穏やかな、しかし何とも「力」のある視線だった。

「そなたにも、武術大会に出場してほしい。そして、そなた自身の力で、優勝を勝ち取ってほしいのだよ」

一瞬。

王室の中を、沈黙が支配した。

「 」

アリーナは、少しだけ、眉根を寄せて、考え込むような表情をすると 不意に、その表情を緩めて、言った。

「なるほどね 」

そして、くるっと横を向くと、ゆっくりと、歩き出した。

「誰か格闘家を雇って、その人に優勝させればいい 」 だけど、男の格闘家なら、報酬としてモニカ姫との結婚を要求されても、大会のルール上、文句は言えない」

右に、左に、うろうろと歩きながら、アリーナは続ける。

「絶対にモニカ姫をお嫁にやらずに済む格闘家を雇いたい 」 そう思っていたところに、私がちょうど通りかかった」

部屋にいる全ての人間の視線が、アリーナに注がれていた。

まるで、事件の謎をひとつひとつ解き明かす名探偵のような口調で ほんの少し、苦笑めいた笑みを浮かべながら。

アリーナは、なおも言う。

「女の私が優勝すれば、モニカ姫をお嫁に行かせなくて済む。だから、私に優勝してほしい。でも 」

鋭い眼光。

「私は、私自身の力で勝たなければならない。エンドール王家は、私を支援しない。そういうことでしょうか？」

「！」

ブライが、クリフトが、そしてモニカ姫が 同時に驚きの表情を浮かべた。部屋の空気が、一瞬凍り付く。

王がひとつひとつ言葉を選んで慎重に言った、その言葉の真意を、アリーナは理解していた。

口当たりの良い言葉に包まれた、冷酷な事実。

それをアリーナは、あえて口にしたのだ。

(なるほど そういう事じゃったか)

冷や汗を一筋流しながら、ブライはひとりごちた。

この大会で、確かにアリーナを勝たせたい。

しかし、王家としては、不正や八百長は出来ない。

世界トップレベルの強者たちが集うこの大会に、そのようなものに手を貸す武闘家が参加するとは思えないし、もしそのような武闘家がいたとしても、不正が発覚すれば、事は重大だ。

いや、それ以前に、大会を主催する王家自らが、特定の選手を優勝させようと動いた、ということが公になっては、それ自体が既に重大なルール違反である。

故に、エンドール王家としては、アリーナとの関係を完全に否定せねばならなかった。

アリーナは王家とは無関係、という立場を堅持せねばならなかったのである。

もちろん、アリーナを支援することなどもってのほか、というわけだ。

しかし、それでもなお、アリーナに優勝して欲しい、という依頼。

あまりにエンドール王家側に有利な、逆に言えば、アリーナにとっては、理不尽とも言えるほどの悪条件である、この依頼。

これを、切り出さなければならなかった。

だからこそ、エンドール王は、アリーナの詰問に対して、怒る事ができなかったのである。依頼を切り出す前であったから。

それを、ブライは理解したのであった。

しかし、彼のもうひとつの疑問　なぜ、アリーナがあれだけ怒っていたのか、それは、まだこの時は、彼は分からなかったのである。

*

「つまり　」

アリーナが、歩みを止め、澄まし顔で言った。

「私は、この大会には、エンドール王家に頼まれてとかじゃなくて、自分が出たいから参加した。それで、サクッと優勝して、女だからモニカ姫をお嫁にはできません、って言って、そのまま去る。これで一件落着、ってね　」

そして、右手で自分の顔を被い、「はぁ　」と大きなため息をついてから、一言。

「勝手ね～」

「確かに勝手だ。余もそう思う　」

エンドール王は目を伏せて言うと、再び、アリーナの方を向き直った。

「が、これしか方法を思いつかなかったのだ」

しばらく沈黙が流れる。

「余は愚かだ　それ故、このような勝手な頼みを、他国の王女殿下にせねばならぬ」

そして王は、深々と、アリーナに頭を下げた。

「どうか、聞いてくれ。余の　愚かな父親の頼みを　」

「お父様！　もう結構ですわ！」

モニカは、涙声になっていた。

「もう　これ以上、アリーナ姫様にご迷惑を掛けられないし　お父様のそんな姿も見たくありません！」

「モニカ　」

「私は、優勝者の許へ嫁ぎます！　ですからもう　」

「ダメよ」

モニカの叫びと涙を止めた　それは、凜としたアリーナの声だった。

「えっ？」

「そんな事を言っちゃダメ。もっと、女の子は自分を大切にしなきゃ」

そう言って、微笑む。

「アリーナ姫様 ？」

まだ涙を目に溜めたまま、きょとんとした表情のモニカの方に歩み寄ると、アリーナは訊ねた。

「正直に言って、モニカ姫 あなた、見ず知らずの男のところに、お嫁に行きたい？」

「えっ？」

モニカが、自分が何を聞かれたかを理解するのに、数瞬の間を要した。

「見ず知らずの男のところに お嫁に 」

「そう。正~直に言って」

アリーナは、真剣な面持ちだ。

モニカは、直感した。

アリーナは、自分の本心を知りたいのだと。

エンドール王の娘である事、エンドール王国の王女である事、そのしがらみの全てを取り去った、人間モニカ・ド・エンドール本人の想いが、知りたいのだと。

それを言えるかどうか、自分は試されているのだ、と。

アリーナを信頼し、本心を打ち明けられるかどうかを、試されているのだと。

だから

再び、数瞬の間があって

モニカは、ついに、本心を口にした。

「嫌ですわ」

「そう 」

それを聞いた瞬間、アリーナの顔に、花が咲いたように、微笑みがこぼれた。

「じゃあ、決まりね」

「えっ ？」

そして、その微笑みのまま、不思議そうな表情のモニカに向かって、はっきりと

アリーナは、言った。
「私が助けてあげる」

「！」

「おお！」

モニカの、そしてエンドール王の表情に、喜びが溢れる！

「　　いいわよね、ブライ？」

振り向いたアリーナの声に、ブライも、

「本来ならば、少し考える時間を頂きたいところですが　　組み合わせ抽選会は明日の
早朝、そう悠長なことってはおられぬでしょう。姫様の御意のままになされませ」
そう、答えざるを得なかった。

(まったく　　してやられたわい)

答えながらも、苦々しげに、心の中で、ブライは呟いた。

恐らく、エンドール王は、この展開を読んでいたのだ。

「おてんばで直情型だが、情に厚い」。

アリーナが、そのような噂に聞く通りの性格であるならば、この依頼を断らないはず。

そうでなくとも、ここで断れば、両国の関係に禍根を残すことは明らかだ。

そして、日程的に、討議して結論を出す時間すらない。

いずれにせよ、アリーナの取りうる選択肢は、依頼を受ける事、それしかなかったのだ。

もちろん、それにアリーナ自身が気付くかどうかは別問題として。

(エンドール王　　食わせ者め)

＊

「出場して下さるか、アリーナ姫！」

「　　勘違いしないで下さいね、王様？」

エンドール王の言葉に、一転、取り澄ました様子で、アリーナが答える。

「私は、モニカ姫を助けるために出場するんですからね」

「む、むう　　」

王が、心なしかがっかりした表情になったその時、不意に、アリーナの表情が緩んだ。

「な～んて」

「？」

「ごめんなさいね王様、ちょっと困らせてみたかっただけなんです」

「??」

その言葉の真意を量りかねた様子の、怪訝そうな顔のエンドール王に、アリーナはにこやかに言った。

「それでは 明日早いので、休ませていただきます 。休む前に、よろしければ、出場者のリストに目を通しておきたいのですけど」

「あ、ああ。あい分かった。あとで部屋のほうに届けさせるとしよう」

「よろしくお願いします」

再び、にこりと笑う。

「それでは、また明朝。ごきげんよう」

王家の礼法に則った挨拶をし、アリーナは王の前を辞した。

「おてんば姫」の異名を取るアリーナも、こうして見ると、なかなかどうして、一国の王女として、決して恥ずかしくない作法と気品を備えている。

ただし、彼女は普段から、そんな堅苦しい礼法なんて嫌いよ、などと言って憚らないのではあるが 。

「それじゃ、先に行ってるわね」

去り際に、控えたままのブライとクリフトに声をかけ、アリーナは王室を出ていった。

「それでは、我らもこれにて」

ブライも、王とモニカに一礼し 横のクリフトを見やった。

まだ、彼は固まったままだった。

こわばった表情のまま、脂汗を流している。

「ほれクリフト、いつまで固まっておる」

ブライが脇から、クリフトをこづく。

びくっ！ と、クリフトの身体が痙攣した。

「 !? ブライ様？」

まるで眠りから醒めたばかりのような口調で、クリフトは言った。

きょろきょろと、辺りを見回す。

「 姫様は？」

溜め息をつきながら、ブライが答えた。

「先に寝室にお戻りじゃ。 何じゃ、緊張し過ぎて周りが見えておらなんだのか」

「申し訳ありません」

悔しそうな顔のクリフト。

「お恥ずかしい限りです。姫様をお守りしなければならない私が、こんな体たらくとは」

「そんなに緊張することはありませんわ、クリフト様」

モニカ姫が、優しい言葉をかける。エンドール王が続けた。

「そうだと。この城に滞在中は、ゆるりとくつろぐが良いぞ」

「この若輩にもったいないお言葉、光栄に存じます」

クリフトは、エンドール王とモニカに、深々と頭を下げた。

「それでは、失礼つかまつる」

ブライが、中腰の姿勢からすっと立ち上がった。クリフトもそれに倣う。

「失礼いたします。おやすみなさいませ」

クリフトの挨拶を最後に、二人は王室を出た。

「おやすみなさいませ、ブライ様、クリフト様」

「ゆっくり休まれよ」

王と王女の言葉を残し、王室の扉が、ゆっくりと閉まった。

＊

「何とか なったな」

今や親子水入らずとなった王室の中で、王は、安堵の溜め息を漏らした。

「でも、本当に良かったのでしょうか」

心細げに、モニカが言う。

「アリーナ姫様に、あそこまでご迷惑を 」

「正直、余にも分からぬ。しかし、こうなった以上、アリーナ姫に全てを賭けるしかあるまい」

しばしの沈黙。

「私、あとで、アリーナ姫様に謝ってまいりますわ」

「そうか」

王は、あえて何も言わなかった。己の勝手さを自覚していたのであろう。

さらにやや沈黙があって、不意に、王が言った。

「先ほどアリーナ姫が言った、『ちょっと困らせてみたかった』というのは

あれは一体、何なのだろうか」

「あら、私には分かりますわ」

困り果てた表情の王に、それとは対照的に、自信たっぷりに、モニカは言った。

「？」

「アリーナ姫には、私の気持ちがお分かりだったのですわ。きっと」

「う、うーむ」

王は、やはり、分からない、という顔をしていた。

(つづく)

< 次回予告 >

運命の密室会談の後、寝室で物思いにふけるアリーナ。

そこに現われた、エンドール王女モニカ。

対照的な生き方を選んだ二人の王女の、互いの想いが今、明かされる。

「不屈の王女殿下(ハイネス)」第2話 「パジャマ・トーク」

少女たちの美しき友情に、幸多からん事を。
